熊大教育実践研究　第29号，145－150，2012

子どもの視点に立った教育に関する一考察
── 小学生のテストを通して ──

吉　田　道　雄

A Critical Analysis of the Test for School Children

Michio Yoshida

(Received October 28, 2011)

教育にとって，子どもたちが〝自ら学ぶ力〟と〝よりよく生きる力〟を身につけることが重要であることに議論の余地はない．こうした〝スローガン〟が明示的に提示されていなくても，それが教育そのものの目的であり続けてきたはずである．ただ，そのためにどのような具体策をとるかについては，様々な教育観，子供観，あるいはそれよりも広く社会観があって，時代とともに揺れてきたのも事実である．そもそも教育が〝問題〟にならなかったときはない．そうした大きな流れのなかで，教育の場である学校では特定の教科書や教材を使い，その成果を測定するための道具を導入する．それらが子どもの教育にとって有効であることを追求するのは，すべての教育関係者にとって当然の行為である．しかし，それらを具体的に検討すると，様々な問題を抱えていることに気づく．

本稿では，1990年代に使用されたテストをもとにして，その問題点を検討し，〝自ら学ぶ〟〝よりよく生きる〟力の育成を目指す教育のあり方について考えることにする．

４年生の国語テスト

ここで資料１として提示しているのは小学校４年生の〝こくご〟のテストの答案である．タイトルは〝言語〟となっており，〝物音を表す言葉・会話文・漢字の書き〟という説明がある．〝教科書（上）P. 106～109〟と明記されていることから，教科書に対応したものだとわかる．その１問目は，〝物音を表す言葉を書いてみましょう〟である．はじめに蛙が池に飛び込んでいるイラストが描かれている．テストの表題には〝まん画〟となってるから，まさに漫画絵ということだろう．それは〈れい〉として上げたもので〝ポチャン〟が正解だとされている．その下に３つの絵が書かれている．その①は水道の蛇口から水滴が漏れている．その次の②は空に大きな花火が大輪のように広がっている．それを浴衣を着た女の子が見上げている．そして③は林に風が吹いているように見える．そのために，木々がたわんでいるようだ．それなりに強い風が吹いているのだろうか．ところで，資料を見ればわかるように，このテストはすでに解答済みで，採点もされている．そして，この回答をした子どもは残念ながら３問とも不正解の〝×〟がつけられている．

回答欄には消しゴムで消した痕があり，それぞれ子どもの字で〝ポタポタ〟〝バーン〟〝ザワザワ〟と書き直されている．これが〝正解〟というわけだ．それではこの子はどんな解答をして〝×〟になったのだろうか．まず①の蛇口から漏れる水滴を〝ポトポト〟と書いた．そして②花火は〝パーン〟，③の風で揺れる林は〝サワサワ〟だった．これには首をかしげざるを得ない．蛇口から落ちている水滴の音は〝ポトポト〟ではなく〝ポタポタ〟なのである．いや，そうでないといけないのである．なぜなら，〝ポトポト〟は〝×〟なのだから．そして，夜空に広がる花火は〝バーン〟と聞こえないと間違いであり，さらに，風に揺れる林は〝ザワザワ〟と音を立てないとまずいのである．それ以外の〝ポトポト〟〝パーン〟〝サワサワ〟だと一刀両断に〝×〟をつけられてしまう．これが小学４年生の〝こくご〟の答案用紙なのである．こうした事実を前にして，疑問を感じないものはいないだろう．そして，〝信じられない〟という声すら聞こえてくるのではないか．

自分の耳に聞こえるものの音が〝こうでなければいけない〟などと決めつけることはできないはずだ．子どもの素朴な気持ちを代弁すれば，〝先生は私に聞こえる音が聞こえないのに，どうして×にするん

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター：
〒860-0081　熊本市京町本丁5番12号
e-mail:yoshida@kumamoto-u.ac.jp

だろう〟と疑問に思うに違いない．それだけでなく，〝私って耳がおかしいんだろうか〟などと誤解することにでもなれば，深刻な事態も引き起こしかねない．教師がそうしたことを意図し，あるいは期待して教育しているはずがない．しかし，このような事実を目の前にすると，〝個性を尊重する〟という，いわば教育の基本的な目標が忘れられているのではないかと疑いたくなる．

もちろん，水滴について〝ガッチャアーン〟や〝ドカーン〟，あるいは〝プスーッ〟といった答えを子どもが書いたときには，〝ちょっと感じが違うよねえ〟などと声を掛けながら修正することはあっていい．〝どんなに聞こえてもいい〟としても，それなりに〝常識的〟な回答の範囲というものはあっていい．しかし，この事例の場合は〝ポタポタ〟と〝ポトポト〟の違いで○をつけたり×にしたりするのだから，やはり問題だと指摘せざるを得ないのである．

そもそもは，教師自身が〝これでいいんだろうか〟と疑問に思うべきなのである．その点の事情については，これが20年ほど前のことでもあり，インタビューなどで確認することができない．しかし，仮に教師がそのことに気づかなかったというのであれば，それはそれで大問題だと言わなければならない．それが〝おかしい〟ことは，少しでも子どもの立場になればわかるはずだからである．

あくまで過去に使われていたものであるから，現在はこうしたものがなくなっていることを期待し，そうなっていると推測するが，実態はどうなのだろうか．まったく同じ形式のものはなくなったとしても，形を変えて，類似した，つまりは子どもの個性を打ち消すようなテストが残ってはいないのかどうか．教師たちにはこうした点から，テストや教材をチェックし続けていくことが求められている．

さて，夜空に広がる大輪の花火についても，〝パーン〟と聞こえてはいけないというのである．正解は〝バーン〟なのだ．たしかに〝ビッグバン（Big Bang）〟という言葉がある．宇宙で起きた最初の爆発で，これを口火にして宇宙が拡大し続けているという理論である．ここで〝爆発〟は〝バン〟となっているから〝バーン〟には近い．しかし，それでも〝バーン〟ではなく〝バン〟である．これで子どもに〝バーンだけが正解〟などと言っても納得されるはずもない．

そして，最後は風に揺れる林の音である．たしかに，この子どもが書いている〝サワサワ〟では，林が揺れる音としては弱い．しかし，その程度の理由で〝サワサワ〟を×にするというのは説得力に欠ける．このテストには関連した教科書のページが記載されている．その部分がどんな内容になっているのかわからないが，自分の耳に〝聞こえる物音〟に○×をつけるという発想には驚きすら感じる．

このテストは教科書会社が作成している．もっとしっかり子どものこと，教育のことを考えてほしいと言いたくなる．教科書には執筆者がいる．自分が関わった教科書に関連したテスト教材までチェックすることはできないのだろうし，その義務もないのだとは思う．しかし，こうした現実を執筆者は知っているのだろうか．仮に，こうしたテストがあることを認識したときは，〝こんな問題で○×はおかしい〟と指摘すべきではないか．自分に〝聞こえるとおりに〟書いた答えが〝×〟にされては，子どもは混乱する．あるいは，〝おとなが言うとおりに聞こえないといけない〟〝おとなが期待するように答えないといけない〟．そんな気持ちを小学生のときから植え付けるのは本旨ではないはずだ．

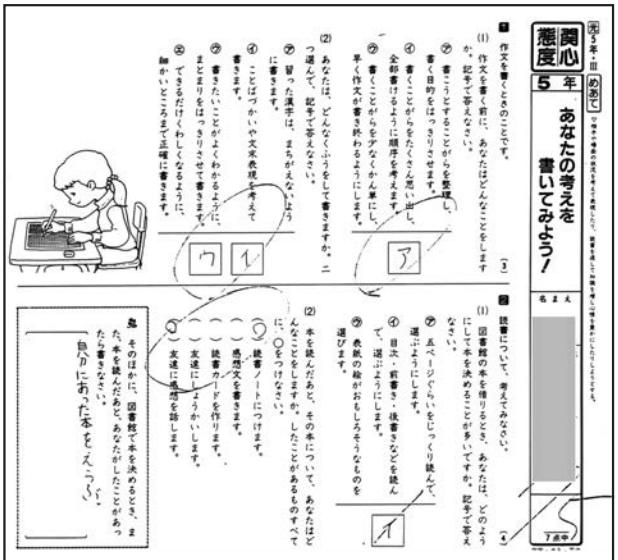
学校では〝自ら学ぶ〟ことが強調され続けている．こうした問題に直面して，〝おとなの言うとおりにした方がいい〟ことを〝自ら学ぶ〟というのでは，なんとも皮肉としか言いようがない．

さて，今度は小学５年生のテストを取り上げてみよう．資料２は，やはりある児童の答案用紙である．〝関心／態度〟という領域で，タイトルは〝あなたの考えを書いてみよう！〟となっている．その２問目に〝読書について，考えてみなさい〟という問いがある．そして質問は，〝(1)図書館の本を借りるとき，あなたは，どのようにして本を決めることが多いですか．記号で答えなさい〟からはじまる．これに選択肢が３つ準備されている．それぞれは，〝（ア）五ページぐらいをじっくり読んで，選ぶようにします．（イ）目次・前書き・後書きなどを読んで，選ぶようにします．（ウ）表紙の絵がおもしろそうなものを選びます〟である．まずは，語尾が〝選ぶようにし

資料１　小学４年生の答案用紙

ます〟と〝選びます〟と異なっているのも気になるが．それは本質的な問題ではない．ともあれ，こう問われたとき，われわれはどう答えるだろうか．いや正確には〝いつもはどうしているか〟が問われているのである．一般的には，〝（イ）目次・前書き・後書きなどを読んで〟を選択する者が多いのだろうと推測はできる．しかし，たとえば学生たちに聞いてみると，書店で本を買うとき〝ほとんどタイトルで選ぶ〟という者や〝数ページを読んで〟という者も少なくない．なかには，タイトル重視で本を開けてもみないという声まで聞こえる．それは〝読書の道〟から外れた邪道なのかもしれない．しかし，それは個人が自分の責任で選択すべきことでもあり，あるいは経験とともに変化していくこともあるだろう．ともあれ，その時点での事実だから，それはどうしようもないのである．したがって，〝あなたはどのようにしていますか〟という問いには〝正解〟も〝不正解〟もないのである．

そこで，資料２の答案を見ると，この５年生の子は×と判定されている．先に見たケースとまったく同じように〝書き直させられた正解〟として〝イ〟が書かれている．



資料２　小学５年生の答案用紙

この子は〝五ページぐらいをじっくり読んで，選ぶようにします〟か〝表紙のタイトルがおもしろそうなものを選びます〟のいずれかを書いていたわけだ．

これもまた，すでに見た〝物音〟の場合と同じ，いやそれ以上に驚いてしまう．あるいは〝あきれた〟という方がわれわれの印象に近いかもしれない．

図書館で〝どのようにして本を借りているか〟を聞かれて，自分の行動について答える．するとそれが〝×〟になってしまう．この問いに〝不正解〟があるはずがないのである．これは小学５年生の〝国語〟の問題なのだが，こうした問題を作成した者の〝国語力〟を疑いたくなる．

どうしても〝正解〟を決めたければ，〝一般的に，どんな方法で本を選ぶ人が多いと思いますか〟とすべきだろう．いや，それでも問題は解消しない．〝思いますか〟と聞いたのだから，やはり〝不正解〟はあり得ないことになる．なぜなら，〝そう思った〟ことは事実だから，それを否定することはできないのである．

ここまで議論すると，それは〝へ理屈，揚げ足取りではないか〟という意見が出るかもしれない．しかし，ここで子どもに身につけさせようとしているのは，日本語のいい意味も含めた〝あいまいさ〟や〝情緒性〟を感じる力ではないだろう．〝論理的な思考力〟を育てることは〝国語〟が担当すべき重要な役割であるはずだ．

いずれにしても〝思っていること〟〝考えていること〟に問題があっても，とにかく〝そう思う〟のは自由なのである．本を選択する問題についても，どうしても〝正誤〟の判定を下したいのであれば，〝どの方法で本を選ぶ人が多いかを答えなさい〟とすべきである．子どもが主観的な判断をしても，それが事実でなければ，〝誤答〟にすることができる．それは〝東京都と熊本県の人口はどちらが多いか〟と問いかけるのと同じレベルの質問になるからである．ただし，この場合も〝日本人の多数が一定の基準，ここでは，〝目次・前書き・後書きなどを読んで〟から本を買っている〝事実〟を押さえていることが必要になる．問題を作成する者が〝おそらくそうだろう〟と主観的に思っているだけでは不十分なのである．少なくとも，子どもたちが納得できるデータをもっていない限り，無責任のそしりを免れることができないのである．

自分がしている行動を聞かれて，そのとおりに答えたら，〝×〟をつけられた．これでは４年生のケースと同じように，子どもたちは，〝事実よりもおとな，とりわけ教師がどの答えを期待しているかを推測して回答することが大事なんだ〟と考えてしまうではないか．小学校の５年生にそんな〝力〟をつけさせようとしているはずはない．

ここでは，資料２のテストで〝×〟をつけられた問題だけ取り上げたに過ぎない．そのほかの問いもまったく同じ問題を抱えているのである．

たとえば第１問は，〝作文を書くときのことです〟

と呼びかけ，〝(1)作文を書く前に，あなたはどんなことをしますか〟と問いかけるのです．そして〝記号で答えなさい〟と指示する．ここでも〝あなたはどんなことをしますか〟と問われているのだから，〝どんな答え〟でも〝誤答〟にはならないはずである．そこで提示された３択を挙げてみよう．〝（ア）書こうとすることがらを整理し，書く目的をはっきりさせます〟．おとなであれば，いや少し理解力のある子どもでも，これが〝正解〟であることは，他の選択肢を見るまでもなくわかる．私の手元にある答案を書いた子は〝さいわい〟にも〝正解〟を選んでいた．さて，残りの２つはどうなっているのか．〝（イ）書くことがらをたくさん思い出し，全部書けるように順序を考えます〟．やはり，いかにも不適切そうな内容である．しかし，作文を書くときに自分の思い出すことはできるだけ書きたいと考えてはいけないのだろうか．それは推奨すべきことではないかもしれない．しかし，それで〝誤答〟としていいものだろうか．ここまでくると，３番目についてはおおよその想像がつく．〝（ウ）書くことがらを少なくかん単にし，早く作文が書き終わるようにします〟．まさに思った通りというべき内容である．これも教師の基準で評価すれば〝×〟になってしまうというわけだ．おそらく，〝（ア）〟以外を選択する子どもで作文が得意な者は少ないかもしれない．しかし，そのことと，こうした問題を出すこととは何の関係もない．この問題が，〝できるだけよい作文を書くためにはどうしたらいいでしょうか〟．先生たちがおすすめのものを次のなかから選びましょう〟．いま見たような３択を提示して，それに〝○×〟をつけるのであれば，こうした問い方しか考えられない．

それに続く〝(2)〟の設問もかなりの問題を抱えている．〝あなたは，どんなくふうをして書きますか〟というのである．ここでも〝あなたは〟なのだから，本当は〝どんなものでも正解〟で差し支えないはずである．これに対しては，〝二つ選んで，記号で答えなさい〟となっている．今度は，４つの選択肢が提示される．〝（ア）習った漢字は，まちがえないように書きます〟，〝（イ）ことばづかいや文末表現を考えて書きます〟〝（ウ）書きたいことがよくわかるように，まとまりをはっきりさせて書きます〟〝（エ）できるだけくわしくなるように，まとまりをはっきりさせて書きます〟である．

これまで見てきた質問とまったく同じパターンである．手元にある答案用紙の子は，こちらも〝さいわい〟，（イ）と（ウ）を選んで〝正解〟だった．

さて，この問題で最初に取り上げた第２問目〝(1)図書館で本を借りるとき，あなたは，どのようにして本を決めることが多いですか〟の次に，〝(2)本を読んだあと，その本について，あなたはどんなことをしますか．したことがあるものすべてに，○をつけなさい〟という質問が続いている．選択肢は５つあって，〝読書ノートにつけます〟〝感想文を書きます〟〝読書カードを作ります〟〝友達にしょうかいします〟〝友達に感想を話します〟となっている．資料２の解答用紙を書いた子は，〝読書ノートをつける〟と〝友達に感想を話す〟を選んで大きな〝○〟をもらっている．ここまで来て，ようやく〝納得できる〟問題になった．ここでは，〝１個〟でも〝すべて〟を選んでも〝○〟になるのである．ただし，これにも不安は残る．もし，提示されたことはどれもしていない子がいたらどうなるか．まったく〝○〟をつけなければ，おそらく〝×〟になるのだろう．しかし，これもおかしい．〝なにもしない〟，〝どれもしたことがない〟といった選択肢も設定しなければ，子どもが取り得る行動について，すべての可能性をカバーしているとは言えないのである．ここで取り上げた問題は，いずれも20年ほど前のものであった．現在は〝この手〟の問題がなくなっていることを祈るばかりである．

しかし，そうしたなかで，新聞の投書欄に〝テスト「不正解」に見た本質外れ〟と題する意見が掲載されたのは，２年ほど前のことである（毎日新聞「みんなの広場」2009年７月）．投稿者は長野県の主婦で，中学３年生の男の子がいる．ここでポイントになる部分を取り上げてみよう．彼女の次男が定期テストを受けた．その〝社会公民〟の問題に〝非核三原則の内容を正確に書きなさい〟というものがあった．そこで次男は〝核兵器を持たない，つくらない，持ちこませない〟と書いた．これに対する評価は〝不正解〟だったという．その理由は簡単で，正解は〝核兵器を持たず，つくらず，持ちこませず〟だからである．たしかに，政府が公式に宣言しているものを〝正確に〟書くのが問題の条件ではある．したがって，完璧に同じでなければいけないというわけだ．たしかに和歌や短歌，俳句などの作品は一文字でも違えば誤りになる．〝古池にかわず飛び込む水の音〟では不正解である．しかし，〝社会公民〟であれば，たとえ〝正確〟ではないにしても，これを〝不正解〟としてしまっていいのだろうか．そもそも，子どもに何を伝えたいのか，教えたいのか．投書した母親もそんな疑問を呈している．そして〝大事なものごとの本質を子どもたちにきちんと教えていけなくなるのではないかと危惧している〟のもうなづける．

もう一つ，原作者が困っている事例もある．灰谷健次郎氏が書いた〝もの書きの嘆き〟（朝日新聞家庭

欄〝いのちまんだら〟がそれである．これは1998年６月17付けのものだが，筆者の作品〝天の瞳〟を取り上げた模擬テストについて嘆いているのである．それによると，〝問題文から読み取れる倫太郎の人物像を簡潔にまとめなさい〟という設問があったという．これに対して，２冊からなる〝天の瞳〟をすべて読んだ高校生が書いた答案が減点されていた．詳細は省くが，これに対して原作者灰谷氏が嘆いているのである．〝すべてを読んだ〟子どもとしては〝すべて〟を読んだ上で書いた回答だったのだが，その内容が問題文を超えていたために減点されたというのである．灰谷氏が訴える．〝わたしには，こう書いた少年の気持ちがよくわかる…．作者としてありがたいのは，彼のような読者をもつことであり，はなはだ迷惑なのは，この様な問題の作成者であり，添削者の存在である…〟．そして，〝一度，公刊してしまった作品は，どう使われても仕方がないという認識はあるものの釈然としない〟と述べたあとで，〝こういう「被害」はしょっちゅうである〟と，さらに別の事例を挙げている．

それは同じ作者の「ろくべえ　まってろよ」という童話についての問題である．これは犬の〝ろくべえ〟が穴に落ち，それを子どもたちが助けるという物語である．それについて，〝ろくべえが落ちた穴は，どれくらいの深さですか〟という問題が出た．それに対してある子どもが〝３メートル45センチ〟と書いて〝×〟になったというのである．灰谷氏は〝45センチというところまで，いっしょうけんめいに考えてくれたのだ．わたしは，そこまで考えてくれた子どもがいとしい〟と述懐する．〝不正解〟の理由は〝文中どこにも３メートル45センチの記述はない〟ということだった．それに対して〝わたしは学校とか教師の冷たさを感じた〟と灰谷氏は嘆くのである．〝性質上，事前に許可を求めるわけにはいかないといわれ，いのちを削るようにして書いた作品を，本意でない使われ方をされ，傷つく子どもや若者を見なくてはならない，もの書きの嘆きを，いくらかは察してもらいたい〟と締めくくっている．

本稿では小学校の国語のテストを中心に，その問題点について検討した．教育が〝教える側の論理〟ではなく，〝教えられる側〟に立って構成されるべきであることに異論はないはずだ．しかし，ややもするとその基本から外れてしまう危険性が背中合わせにあることを忘れてはならない．そのためには，日常のチェックを続けていくしかないのである．